



福島成蹊中高一貫

学校通信

令和2年2月1日

令和元年度

第12号



大学受験から学べる事

校長 本田 哲朗

成蹊の一貫教育の核心は“ひと”を創る事にある。四季の自然にふれ、夏には海に親しみ、冬にはウィンタースポーツに興じる心を育むのも、やがて、人の魅力に繋がるとの想いからだ。この所、秋の大雨に続き気候が心配である。なぜなら、本来あるべきもの(雪)が無いからだ。この季節、本校はスキー教室を行っているが、スキー場でうかがったら雪不足は昭和38年以来だと聞いた。私達は、中緯度に住む民として、四季の中で生活を営み感性を磨いて来た。だからこそ、些細な異変にも敏感なはずだが、近年の動きを思うと心配が募る。果たして温暖化の問題を、本当に真面目に解決しようとしているのだろうか。

本論に入ろう。大学入試の本質は、入試問題に対し解を導く事にある。受験生には自己の課題(問題)の解決と同じなので、ある意味、最近言われる問題解決力が試される機会が大学入試試験になるかも知れない。そんな中、最大規模のセンター試験が最終をむかえた。同日程・同問題を約55万人が受験し、10万人強が受験準備者(浪人生)だと言う。従って、同年齢…は、条件にはならない。今般、一年前になる事もあり、最後のセンター試験より、次年度の共通テストに話題の主役が奪われた感が強い。変更や見直し云々で、何が何やら混沌となってしまった感じすらする。試験はまず公正・公平が前提になるが、その担保をキチンと表明できなかった事に端を発した。とは言え、東北・北海道…離島等の受験生は、地理的条件によるハンディキャップはあったはずだ。正直なところ、今更何をと思うのは私だけではないであろう。

昨日、次期『共通テスト』の大枠が公表された。話題の主、『国語・数学・英語』の試験時間や回答方式は変化なし。英語の出題方針に変更がある様だが、大きく変わる気がしない。その中で、私はむしろそれ以外のところが気になる。例えば『志望理由書』の提出とか…e-ポートフォリオ(キャリア・パスポート)に追われ、肝心の本質を見失う事が心配される。これまでも度々触れて来たが、教育改革の根幹は、真摯に勉強に向かう事であり、あくまでも学力の担保が眼目なのだ。動機づけ(レディネス)や、興味・関心の醸成が大切ではないとは言わないが、学力は実際に勉強しなければ絶対に身に着かない。これだけは言える。従って、これをないがしろにしたら本質を欠く事になるし、可能性など生まれるべくもない。

本来、人は真摯に自分と向き合い、自分の至らなさ(弱点)に気づく事が重要である。そして、その問題の解決(改善)に向け、真剣に努力する事が自己向上をうむのだ。学力も同様で、自分と向き合い、努力する事で向上する。中には、類まれに弱点を補って、なお、利点の効果の勝る人がいる。分野を問わず、プロと称される人達だが、しかしながら、努力なくしてそうなれたわけでは決してない。思うに、人の本質は、持って生まれた才能の差などほとんど無いに等しい。想いの強さ・深さ・高さ、そして、努力の違いが結果に差を作るのだ。大学受験の合否もまったく同じで、そこに公正の根拠と、真理が見え隠れする。